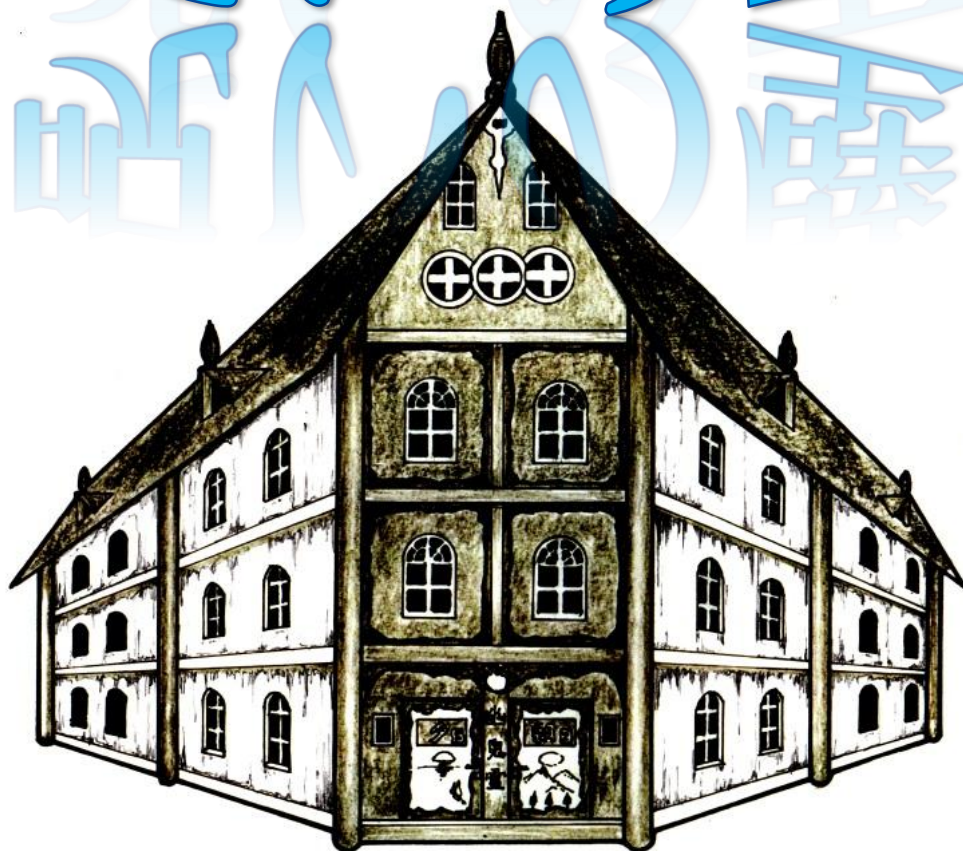


# 呪いの壁



霧村悠康  
きりむらゆうこう





大音響が一発、屋敷内に轟いた。音はしばらく空気を揺さぶりつづけた。

男がうめき声をあげて胸を押さえ、前のめりに倒れた。見る見るうちに赤い液体がテーブルにひろがっていった。

「何の音？」 「どうしたの？」

前夜に降った大雪が、明けて一面を銀世界に彩り、蒼天の陽が昼の地上を白く染め上げても、まだまだ冷気漂う中、雪は溶けることなく夜の底をぼんやりと浮かびあがらせていた。



二〇〇八年冬の夜、一人の老人が自宅一階にある食堂で、心臟を銃弾で射抜かれたのである。

被害者は朱に染まった胸を食卓に伏し、短時間のうちにことされた。

二階の自室で大音響に驚き、真っ先に駆けつけた留香が、身動き一つしない父親の姿を食卓に見つけて、腰を抜かさんばかりに驚いた。

二歳年上の姉華蓮の夫、淵根良夫が老人の横にぼんやりと突っ立っている。

良夫を訝る目で見た留香は、父親を揺さぶった。

「お父さま、お父さま」

老人に反応はなかった。

首が俯いたまま、ぐらぐらと反復運動をくり返した。

豪華な縁取りの彫刻をほどこした食卓に溜まった血が、縁をつたってぼたりぼたりと老人の膝元に落ち、ナイトガウンに吸い込まれていった。

留香はまだぼんやりとしている良夫に詰め寄った。

「あなたがやったの？ どうして？」



良夫の視線は遠くに焦点が定まらない。上体が揺れていた。

「警察に知らせなくては」

瑠香は良夫の顔をにらむと、駆け出そうとした。

良夫が大きく身じろぎした。彼はしゃがまれる声を絞りだした。

「ま、待て。あっちのほうだ。あっちからだ」

ぶるぶると伸びた良夫の腕が、食堂につづく客間との間にかかっている厚いカーテンを指さした。そのとき横のホールにつながる扉が開いて、華蓮と二人の女中が顔を出した。

「何かあったの」

華蓮は中の様子を一目で見取ると、悲鳴をあげ、動かない父親に駆け寄った。食卓に突っ伏した上半身から真っ赤な血が流れ出ている。

華蓮はふらふらと父親の背にもたれかかった。

「お父さま……」

瑠香は思い切ってカーテンを開いた。食堂からの光で部屋がぼーっと薄明かりに浮かび、足元に自分の影が揺れた。

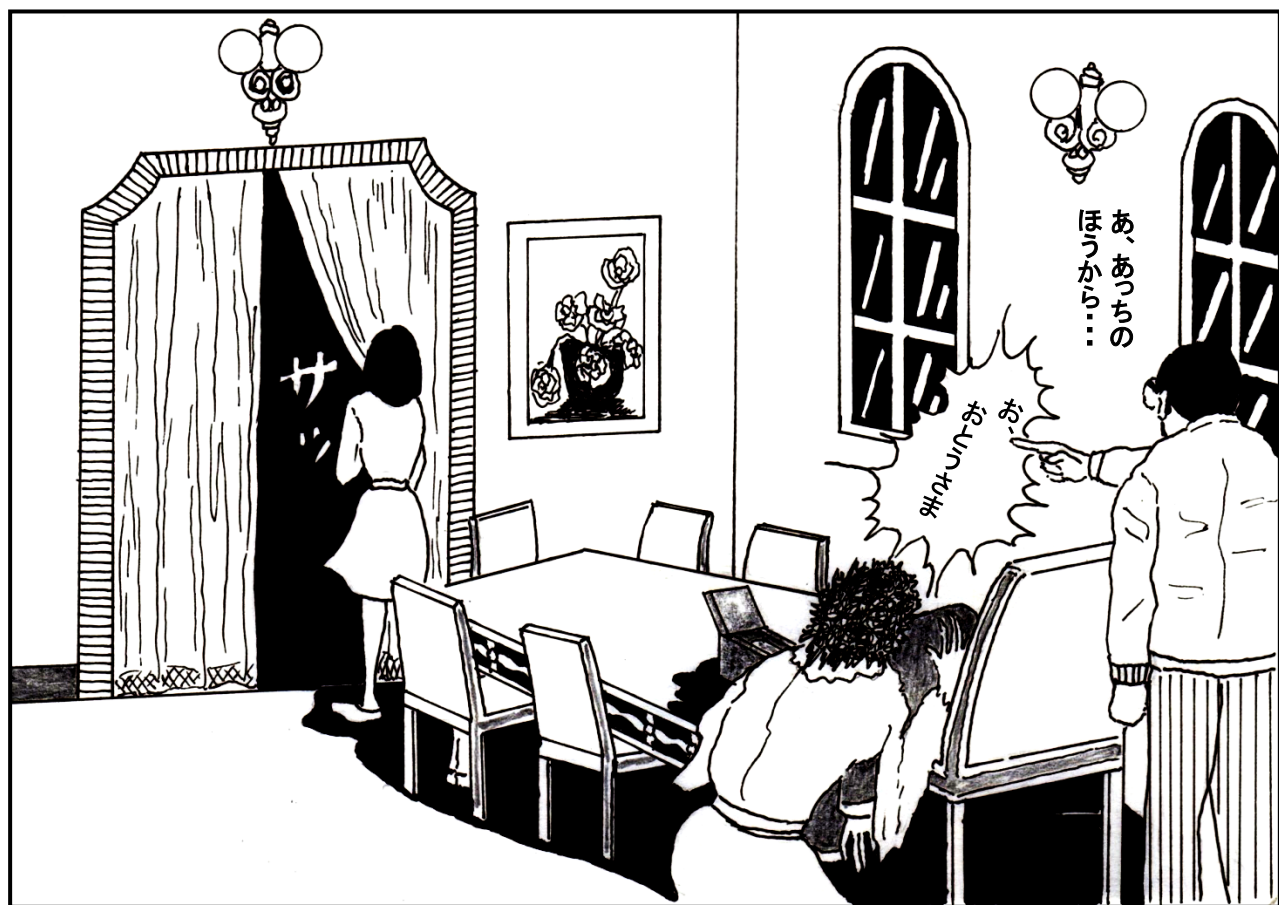
瑠香は壁のスイッチを押した。

豪華なシャンデリアがきらびやかな光を放った。

たちまち影は消えて、赤一色の絨毯を敷きつめた床が目の前にひろがった。

この客間の反対側は玄関ホールにつながっていて、扉はぴつたりと閉まっていた。

左手の廊下へ出る扉も閉ざされていた。



部屋の真ん中に大きなテーブルがひとつ、右手の壁際に長いソファが置かれている。ほかに一人がけ二人がけのソファ椅子が無造作に散らばっている。

テーブルの向こうに二本の足が見えた。

「だ、誰？」

瑠香は恐怖をこらえて、テーブルの縁に手を添えて、横をそろそろと進んだ。

黒いスーツを身につけた男が転がっていた。

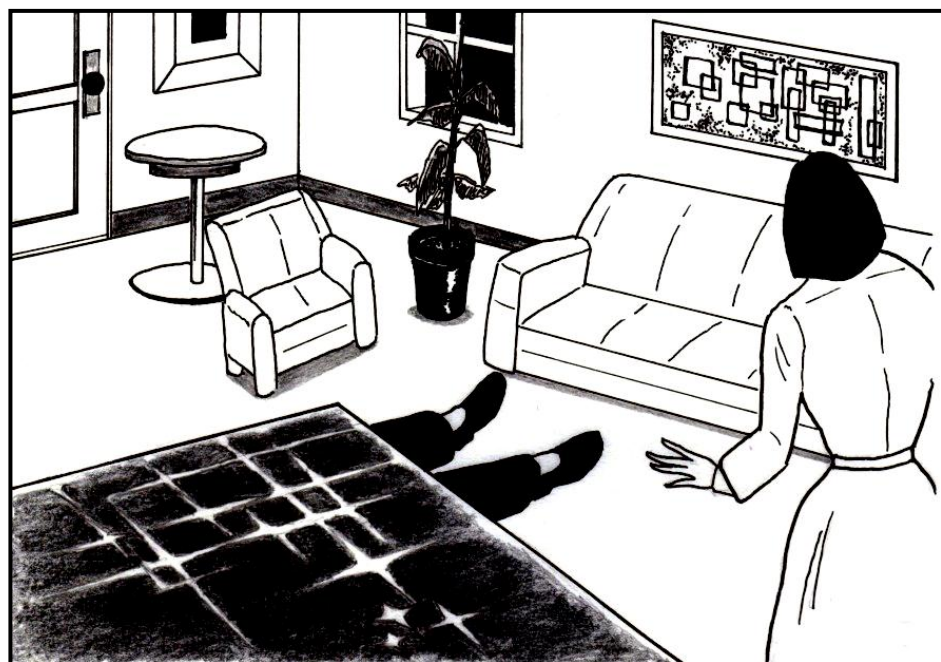
「まあ、火谷さん！」

転がっている男は、執事の火谷だ。

火谷老人は身動きひとつせず、目を閉じていた。何だかいつも見慣れている顔と違う。

左側の頬が紫色に腫れあがっていた。

両方の腕はねじれて、絨毯に投げ出されている。



火谷が父親を襲った犯人だとは考えるべくもなかった。

一家に従順に仕え、

わがままな父親たちの機嫌をとり、文句ひとつ言うことなくつくしてきた、気のよい老人だった。

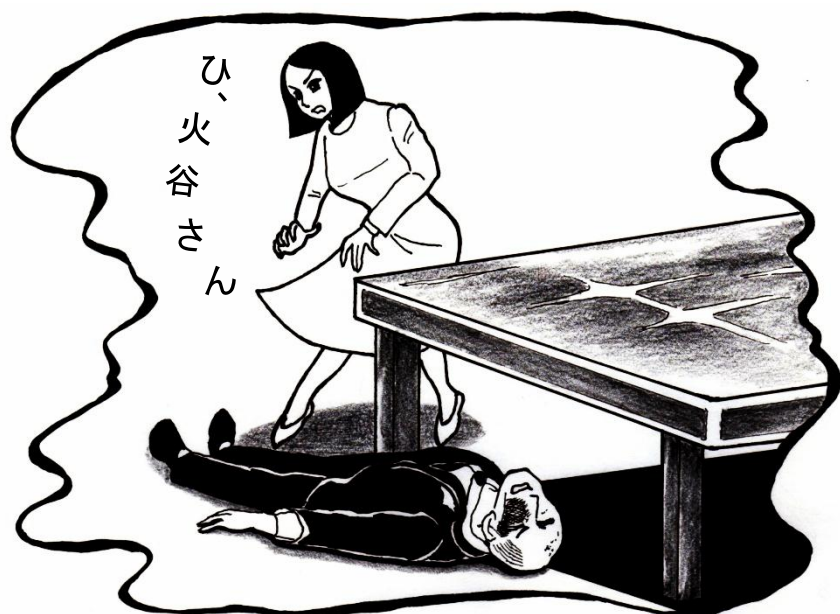
歳は七十近い。瑠香

が生まれる前から、この家で働いていた。家族同然の男だ。

瑠香は火谷を抱き起こした。老人はぐったりとしていて、意識は戻りそうにない。

青白い右半面の顔。醜く目蓋の下まで膨れあがった左半面。まるでお化けのようだ。

食堂から華蓮の「救急車を、警察を」と叫ぶ声が響いてきた。瑠香は火谷老人の上体をそっと絨毯の上に戻すと、部屋の隅にある電話に走り寄り、ふるえる指で110をプッシュした。



ひ、火谷さん